

審查副教授資格
人文社會類科
參考著作(一)

著 作 名 稱

〈植民地ではない風景を求めること・描くこと—林芙美子の「台湾風景」をめぐって〉

《世界の中の林芙美子》(日本大学芸術学部図書館 pp.104-121、2013年12月出版)

中 文 標 題

尋找・書寫不像殖民地的風景—論林芙美子〈台灣風景〉

〈殖民地ではない風景を求めること・描くこと—林芙美子の「台湾

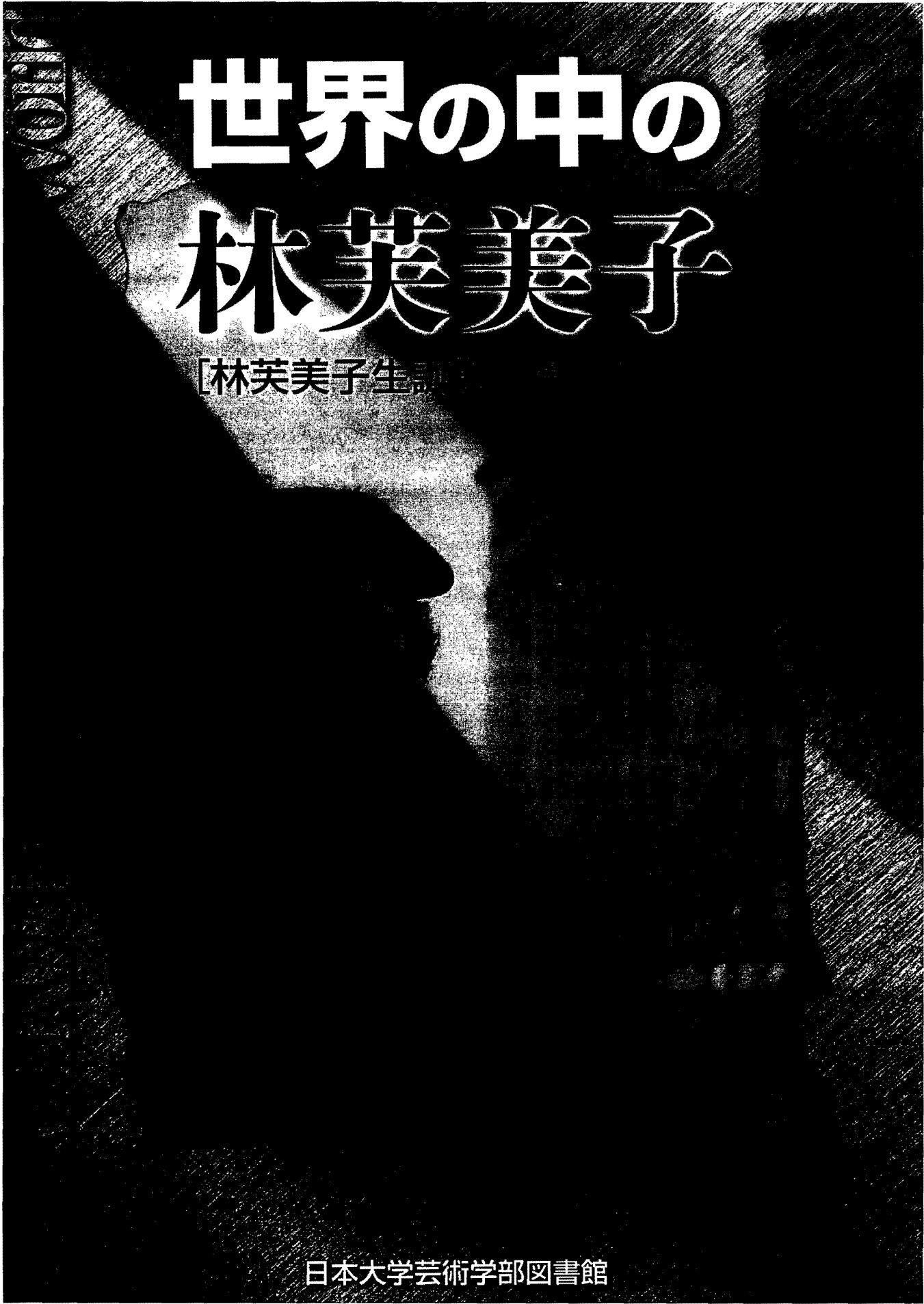
風景」をめぐって〉

《世界の中の林芙美子》（日本大学芸術学部図書館 pp.104-121、2013 年 12 月出版

中文標題・摘要

尋找・描寫不像殖民地的風景—論林芙美子〈台灣風景〉

林芙美子是愛好旅行的日本女性作家。1930 年正月，她膾炙人口的作品《放浪記》還在連載期間，林以「婦人文化講演團」講師身份與其他日本女性共同來到台灣。這也是林首次的「外地」旅行。在無論是職業或背景皆不同的這些女性文藝家眼裡，1930 年代的殖民地台灣風景為何？本論文將分析林返日後發表的台北相關作品，並與其他作家的作品進行比較分析後，再針對以上的提問提出論述，而論文中也提出林的殖民地台灣書寫代表的時代性意義。



世界中の 林芙美子

[林芙美子生誕100年]

日本大学芸術学部図書館

清水正 日本大学芸術学部図書館長

『世界の中の林芙美子』刊行に寄せて……………2

世界文学の中の林芙美子——林芙美子が読んでいた本を探る……………清水正 ● 7

心の旅路にルバイヤートを……………浦野利喜子 ● 40

外国語に翻訳された林芙美子作品目録……………戸田浩司 ● 42

漣波——満たされない女たち……………小林リズム ● 48

フランス・カルコの『巴里の夜』に寄せて……………穴澤万里子 ● 50

日本を越え出る林芙美子の文学……………山下聖美 ● 56

——アジア各国における林芙美子研究の実践——

林芙美子 哈爾濱・奉天・上海・杭州への旅……………久保卓哉 ● 72

——昭和5年初めての満洲・南支行——

文学者と文芸銃後運動……………スーシー・オング ● 86

日本軍政期インドネシアにおける林芙美子の足跡

林芙美子がみた「オタス」……………加藤絢子 ● 92



ロシアにおける林芙美子 翻訳と批評……………

エレナ・A・アイコンニコワ
アレクサンドラ・S・ニコノワ ● 96

植民地ではない風景を求めること・描くこと……………

李文茹 ● 104

——林芙美子の「台湾風景」をめぐる

林芙美子と〈朝鮮〉——韓国における林芙美子の研究の現在……………

嚴璋美 ● 112

林芙美子の小説『浮雲』における……………

フィトリアナ・プスピタ・デウ

太平洋戦争の戦時中・戦後の平民女性のフェミニズム……………

林芙美子の『浮雲』と『罪と罰』について……………

清水正 ● 130

林芙美子が見た中国(戦前)——「北平の女」「北京紀行」「上海の女」……………

平岡敏夫 ● 143

林芙美子の古里——『浮雲』から聴こえる音楽から……………

土野研治 ● 155

林芙美子と神社

〔日本大学芸術学部所沢校舎公開講座より〕……………

佐藤洋二郎 ● 163

『放浪記』『浮雲』にみる「放浪」……………

此経啓助 ● 173

3

中・村・文・昭・の・文・学・空・間

『要の文学者』——詩と小説の統合とは？……………

● 179

中村文昭・クリハラ冉・鯉淵史子・小山博史



世界の中の林芙美子

[林芙美子生誕百十周年記念]

平成25年度学部長指定研究

代表(監修).....清水 正

研究メンバー(執筆).....中村文昭 山下聖美 戸田浩司

執筆協力.....穴澤万里子 浦野利喜子 加藤絢子 久保卓哉
小林リズム 此経啓助 佐藤洋二郎 土野研治 平岡敏夫
李文茹 嚴璋美
エレナ・A・アイコンニコワ アレクサンドラ・S・ニコノワ
スーシー・オング フィトリアナ・ブスピタ・デウイ

in the World

発行人.....清水 正

発行日.....2013年12月10日

発行所.....日本大学芸術学部図書館

〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1 [江古田校舎]
TEL 03-5995-8306
〒359-8525 埼玉県所沢市中富南4-21 [所沢校舎]
TEL 04-2993-2219

装幀・デザイン.....森嶋則子 [SPEECH・BALLOON]

印刷・製本.....株式会社 新生社



植民地ではなく風景を 求めること・描くこと —林美美子の「台湾風景」をめぐって—



はじめに

旅好きの作家として知られている林美美子の最初の「外地」旅行先は台湾だった。一九三〇年正月頃、「放浪記」の連載中に、婦人毎日新聞社の創刊一周年事業で行われた「婦人文化講演団」の講師として参加したのである。林も含めて講演団の女性講師の多くは女性文芸誌「女人芸術」の同人であり、当時においてはハイカラーや前衛思想を象徴するヘアスタイルをした、女性の恋愛や家制度からの自立の主張者たちであった。

職業も生き立ちも異なる彼女たちは、一九三〇年の台湾をどう見て、またどう描いたのか。植民地を描くことは文芸作家にとってどういう営為だったのか。これらの問題を

めぐって、本稿は台湾の風景とくに台北をめぐめる描写の仕方に焦点を据えながら、林美美子のテキストを主な題材として比較分析を行う。具体的にはまず「婦人文化講演団」の当時の状況や女性講師間のさまざまな立場を明らかにしたうえで、ルンペン的な個性を持つ林美美子の作家としてのスタイルを浮き彫りにする。つぎに林美美子と生田花代、北村兼子などによる台湾風景の描写の仕方を比較しながら分析したうえで、女性作家である林美美子にとつての植民地の風景を求めて描くことの文芸的な営為の意味を明らかにし、現代における林の植民地台湾を描いた作品の、新たな時代的価値の抽出を試みる。

る台湾関連の作品を取り上げながら、植民地支配をめぐめる政治的な関心・批判精神の温度差を指摘し、後者は総督府の監視のもとで開催された「婦人文化講演会」の様子、地元紙による事前の宣伝及び報道、さらに講演後にもたらされた様々な波紋を、新聞・雑誌記事を手がかりに、当時の巡迴講演の実態として描出している。

さて、一行が台湾に到着した日、台湾総督府で行われた茶会における講演団の女性たちの様子を、北村は「新台湾行進曲」（婦人毎日新聞台湾支局、一九三〇）で次のように語っている。「断髪のもの、ハイカラーの娘、男のやうな女義、左傾の女闘士など総督を中心にしてしゃべり立てるところ、頗る天下の奇観」（頁37）。このような「ハイカラーの娘」「女義」「左傾の女闘士」らの訪台に先だつて、「台湾のお方に安心」を与えるため、北村が「台湾日日新聞」「台南新報」に掲載された記事で語った内容を、「新台湾行進曲」で見ることができる。「私たちをもつて家族制度破壊者とするは当然ぬ。破壊者の無茶もの一行が平和な台湾に侵入するものとするは以ての外である。家族制度の破壊といふことは全部が悪いのではない。家族制度のうちで時代に適合しないものが新しいものと取換へられるのは望ましいことである。家族制度は舅姑を貴重として建てられたものであるか、夫婦を土台として建てられたものであるか、前者ならば確かに幾分は破

壊せられるであらうが、後者ならば私たちは家族制度の支持者である。」（頁12）

ここでいう家族制度は農村社会から産業社会へと転換していく時代のなかで次第に目立つてきた核家族や「職業婦人」の存在と無縁ではないと推測できる。さらにいえば、そこから派生してきた女性たちの政治や職業などといった問題を取り出すことも可能である。実際、この一団の中では、北村は女性の参政権の提唱者であり、望月は山川菊栄、神近市子と共に「女人芸術」の創刊号巻頭に「婦人解放の道」と題した論文を載せ、全人類そのものの解放を伴う婦人の解放を提唱している。特に望月は、結婚を拒否し同様の形をとり続け、さらに自らの母権を守るため私生児を産むブルジョア階級の女性弁護士を描いたフランスの小説「みづれ」を翻訳し、「女人芸術」（一九二八・一二―一九三一年・五）に掲載していた。生田花代は「青鞥」時代からフェミニスト思想の先駆者でもある。

もちろん、台湾総督府の監視下で開催されたこの巡迴講演においては、講師たちの言論には、つねに制限がかかっていた。だが、たとえ講演の影響が限定的なものだったとしても、そのような思潮を渴望する台湾人女性たちが同時代にいなかったわけではないことは想起されよう。つまり二〇年代後半、台北を中心に都市文化が形成されるなか、いわゆる職業

一、ハイカラーな日本人女性たちと 台湾のモダンガールとのすれ違い

一九三〇年一月五日から十八日まで、日本婦人毎日新聞社が創刊一周年記念事業として台湾で巡迴講演の形で「婦人文化講演会」を行った。その講師の一人でもある生田花代「明るい台湾の生活」（婦人之家社、一九四二）のなかで一行を次のように紹介している。「二〇年婦人毎日新聞社長と故松崎天民氏、島根義太夫氏、婦人は、山田やす子女史、北村兼子女史、堀江かど江女史、望月百合子女史、林美美子女史、他に手芸、洋裁の女の人、二人、そして私の合計十一人であつた。」一行は台北を初め、新竹、台中、台南、台南、高雄、嘉義、基隆などといった西台湾の代表的な都市を回りながら講演をすると同時に官邸や台湾の代表的文化人をも訪問し神社参拝も行っていた。

一九三〇年の台湾で開催されたこの「婦人文化講演会」をめぐる史実情報及び時代の輪について、先行研究として「知識人女性の台訪問と台湾認識」（石月静恵、二〇〇五）、「女性作家の植民地台湾への行進―婦人文化講演会」とその文芸的な所産をめぐって」（福景、二〇〇六）などが例に挙げられる。日本人の女性作家や文化人と台湾との関係への及箇所にかきつていえば、前者は二〇年か、四二年までに台湾旅行をした林歌子、林美子、野上彌生子、佐田稲子、市川房枝らに

婦人やモダンガールがすでに社会現象として存在していたし、女性たちは都市での生活時代の流れに合致したライフスタイルや社会参加の形を求めていた、と思われる。しかし、楊の論にもあるように、婦人文化講演会は台湾人女性を主な聴衆として想定しておらず、講演会の入場料も当時の台湾人の平均収入から見れば高いものだった。総督府が指定した場所以外での行動が制限されるなか、講演一行は結局、今回の講演料を自由行動の費に支払う条件を受け入れ、帰国前日、自由行動の機会を得たが、それでも現地の生活と人々に触れる機会をあまり得ることなく帰還にいた。

台湾トキエメンタリー映画「ダンス時代」国語「跳舞時代」（二〇〇三）では、二〇年代後半から従来の家制度に疑問をもつ、自由愛を求める歌詞を持つ流行曲が紹介され、ダンスホールで、伝統的な家父長たちに好まれない男の男女の接触を気にせず社交ダンスを楽しむ「黒猫」（台湾のモダンガール呼称）たちが登場している。このようにモナリスされた台湾人女性たちと、婦人講演の「ハイカラーの娘」「女義」「左傾の女闘士」らは、台湾という土地・台北という都市で、

わることなくすれ違つてしまつたのである。

二、「女人芸術」の講師たちの さまざまな思い

「婦人文化講演団」の女性講師は、手芸・洋裁の講師のほかは、多くは女性文芸誌「女人芸術」の関係者である。

読売新聞社の女性記者を経てフランスへ留学した望月百合子は「女人芸術」講演部長として活躍したアナキストの「モダン娘」である。望月は台湾での「婦人文化講演」を終えた二ヶ月後、高群逸枝、平塚雷鳥等と共に「婦人戦線」を創刊している。尾形明子によれば、この雑誌は「マルキストが主流となった『女人芸術』に対し、アナキストによる雑誌」だといふ。北村兼子は大阪朝日新聞社のジャーナリストを経て「婦人毎日新聞」の論説部長を務め、訪台前に第一回万国婦人参政権大会（ベルリン）に出席して英語とドイツ語による演説をした女性参政権の提唱者であり、「女人芸術」の寄稿者でもあった。近代文学史上、最初の女性の手による女性作家論「近代日本婦人文芸 女流作家」（行人社、1929）の著者である生田花世は「女人芸術」の編集作業における重要な存在で、堀江かど江は「女人芸術」で身体と恋愛の関係を説くアナキストである。また、台湾より帰国したのちに、印税収入で二ヶ月ほど中国大陸を旅行した林美美子は、この時期「女人芸術」に「放浪記」（改造社、1930）を連載している。

きなく歓待をうけた」（頁38）、「石塚総督には藤田嗣章翁から紹介状をもらつてゐた。藤田翁は有名なパリの国際画伯嗣治フジタの歿父、パリでは藤田嗣治氏の邸へ遊びに行つた。中絶そんな事から自分の孫を見る目で私をみてゐてくださる仁である」（頁39）、「婦人も令嬢も温和な優味のある人で、内地からきた私をねぎらつて紅茶をすゝめて下さつた」（同上）。石塚総督の視線から「自分の孫を見る目」を感じ取つたり、上層階級の女性の親切に好感を抱くなど、北村が総督府の歓待を愉快に受け入れた様子がうかがえるのだ。

いっぽう林は、帰国後「改造」三月号で掲載されたエッセイ「台湾風景―フォルモサ縦断記―」（以下で「台湾風景」と略す）で、次のように心境を漏らしている。台北に到着したとき、「最初に私が連れて行かれたのは、台湾総督石塚氏の御座所である官邸であつた。（略）雲水の破れ衣にも似た、ビラビラの夏のドレス一枚で」茶会に呼ばれ、「磨いた床の上に、靴の泥が落はしまいかと心配」し、「およそ何といつても、場違いの人間が、きつ、ない思ひをしあふのは、一寸どちら様にも気の毒な話であるが、台湾の風景に憧憬れ来た私は、沈黙して歩いて行くに限ると、ハムも、サラダもキレイに頂戴して感謝の意を表した」（頁145）とかで、「場違い」などところにいる居心地の悪さを表現している。このほかにも、新竹では田端知事官邸、台南では永田知事官邸などの

北村や望月のような豊かな海外経験の持ち主を除き、一般女性たちにとって一九三〇年に植民地を旅するというのはいかなるものだったのか、生田花代を中心に見てみよう。生田は「青龍」をはじめ、前述したように長谷川時雨が創刊した女性文芸誌「女人芸術」のなかで中堅の存在であつた。終戦まで二度にわたり台湾で講演を行った彼女は、一九二九年（婦人文化講演）と一九四二年（銃後講演）に、それぞれの旅行見聞を「台湾の第一印象」と「台湾の第二印象」と題し、「明るく台湾の生活」に収録している。最初の台湾行については、「昭和四年の十二月の初めの事であつた。婦人日々新聞といふのがあつて、その社長恒仁氏が、台湾総督府の協賛を得て、台湾西部の都市を「婦人文化講演」といふことで回る計画をたてた」（頁101）と綴られているが、ここのいう「婦人日々新聞」は正しくは「婦人毎日新聞」である。

一九三〇年、台湾が日本の領有下に置かれてから三十五年間余りが経つたといへ、内地から台湾へ旅をするのは決して容易ではないことや、またそのような時代に生きた生田の台湾印象が、次の記述から垣間見えてきよう。

「今から十二年前の旅である。台湾へ行くといふ事は、官吏とか、商人とか、ごく少数の旅行者以外、渡航といふ事はきかなかつた頃である。新聞は山嶽地方の蕃地の駐在所襲撃をよく報じてゐた。そんな事と砂糖とで、台湾は、内地へその存在を明かにしてゐた時代

官邸訪問もあり、それを林は「また知事官邸へ」（傍線は引用者による）というように、「1」で言いよんでいる。官邸めぐりは林を悩ませたようで「女人芸術」に寄せた短いエッセイ「台湾を旅して」（1930・3）でも「団体行動、見たいところもカットして、八カ所の知事官邸と台湾料理、紳士シユク女諸君へは、良妻賢母の講演、台湾の暑さよりも、自分自身ののほせにうだりそうであつた」とあるように、官邸に呼ばれ、「紳士シユク女」に交わることに対する、林美美子の精神的な疲労が表現されている。そして、彼女はこのエッセイの最後で、「私は一人でもう一度台湾へ来たい」、「台湾も秋はい、と聞くと、そのときは一人で」と、「二人旅」への願望を吐くことになる。行動や言論が制限されたこの巡迴講演は、日程的にもそも骨の折れる仕事だったが、講師らが感じた疲労のなかに、おそらく新調した淡青い台湾服と「雲水の破れ衣にも似た」夏ドレスに象徴されるような、講師間に存在する種々な差違からきた気苦労もあり、それがのちに、台湾地元紙に講師間の不仲を報道されてしまう事にもつながるのだ。

三、台北の風景(1) 「常識以外の何ものもない 台北の城内」

パリを「放浪」したり、日中戦争時期に中国

である。（頁11）、「私には、台湾は瘴癘の土だといふことがまづ思はれた。全島が險峻山嶽地帯のやうな気がした」（頁12）。「駐在も「砂糖」も、植民地台湾における、内地資の経済活動にとつて重要な意味を持つ言葉ある。襲撃された駐在所の多くは、樹木伐業社や樟脳製造業社などの関係者、山林の住民族を管理する巡査や警察が駐屯していたつまり山林の天然資源・人的資源を開発、管する場所の代名詞として捉えられる。砂糖は原料となるサトウキビの栽培から精製に至までの、全てのプロセスで農民や労働者を取した生産物である。「蕃地」、「険峻な山嶽地帯」、「砂糖」は一九三〇年前後の植民地台湾を背後にもつた名詞でもあるのだ。この廻講演では、一行は台湾製糖会社を視察し、帯果実試食にも参加した。

ところで、講演団における「女人芸術 関者」のなかで、下関で行商人の子として生まれて尾道から生計を立てるため上京後、仕事を転々としてきた林美美子は特異な存在だといへ、ここで、台湾総督の官邸の茶会に招待された際、北村と林の感じ方の相違についてみよう。まず「新台湾行進曲」の随所に、茶での歓迎を喜ぶ北村の様子が見られる。例えば「石塚総督は温厚慈父に似てゐる。私の知た合ひの武内作平氏（引用者注：1931年に第27次政局長官となる）とは別懇の人、また私の大伯河村讓三郎氏とも貴族院で旧知の間柄、心

を初め満州、インドネシア、フィリピンなど踏破した林美美子は同時代の女性作家のなかでは旅好きの作家として知られているが、女にとつて最初の「外地」旅行は台湾だった。帰国後、林美美子は上記の「台湾風景」、「東を旅して」のほか「植民地で会つた女」（「東朝日新聞」1930・7）、「台北より」（「女人芸術」1930・2）などの作品を発表した。「台湾風景」のなかで各節のタイトルはすべて「台湾の地名であり、基隆、台北、大稻埕、北投温泉、萬華女紅場、新竹台中、台南・高雄、屏東第一印象」も北村兼子の「新台湾行進曲」にある台湾関連の随筆の節も同じ付け方がさしているが、その順番は基隆港、台北、新竹、中、嘉義、台南、高雄港、屏東である。三者を比較すれば、林がとくに「台北」と、「大稻埕、北投温泉、萬華女紅場」とを分けて紹介し、述べていることに気づく。官僚と台湾の知識人たとの交流を誇らしげに綴つたり、台北駅周辺の自動車と人力車をめぐる賃金問題から台の労働者問題を取り上げたりする硬派の北村風景が描いた台北ものや、旅先の気候及び車窓風景を淡々と描いた生田による台北ものと味違い、林の「台湾風景」のなかでとく「大稻埕」、「萬華女紅場」の部分は観光者「素直な」まなざしを通してエキゾチックに写されている。

大稻埕も萬華女紅場も同じく旧台北城（二

にあるが、「台湾風景」の「台北」とは「城内」を、すなわち官庁街や内地人の居住地のある地域を指し、「大稻埕」や「萬華女紅場」は、台湾人の生活の場である「城外」を代表している。作品ではまるでコンクリート建築物と同じような温度で描写された「台北城内の町」とは対照的に、「台北の城外」の「市場の中の野菜屋も煮込み屋も魚屋も、古物屋、古着屋、雜貨屋」のある風景は、視覚や嗅覚、皮膚感覚などを駆使して描出されており、「ゴッホ」の絵のような雰囲気でも描き出そうとするあまり、時には過度な粉飾も感じさせる。そのような城外を林は「素直に驚いて通り過ぎた」という。その「素直」さは、書き手のこれからの描写に対しての自らの確信犯的な姿勢を予告するものでもあるのだが、それについては後述する。

まず城内だが、「小説以上の歴史のある」港灣都市基隆から、鉄道で移動したばかりの林の目に入った台北市街の光景は、決して肯定的に捉えられているとは言えない。「塔偉！塔偉！轟々たる列車の音が消えると、駅前の広場は蜂のやうにワンワンと塔偉の群、自動車の洪水だ。舗道を飾った相思樹や榕樹の毒々しい緑は、カラリと晴れた台北の空に、隆々と繁つて、まさに植民地植民地だ。」（『台湾風景』、頁144）名詞の植民地が重ねられ形容詞として使用されることによって、「近代都市」の人工的な見せ物としての雰囲気がいっそう醸し出されている。その林がいう「官僚臭」と

か「教室にはいつたやうな窮屈さ」があるとかといった場所は「台北城内の町」である。このエリアに総督府や台北高等法院、総督府官邸のほか、公園（現二八公園）と内地人の居住地もある。「台湾風景」で詳細に言及されていない具体的な場所を、同行者の生田の「台北について」は次のように記述している。「引用者注：基隆から四時頃ついた台北は給葉書でも人の知るとほり日本内地人だけのすむところが近代都市を形作つてゐる。（中略）自動車に乗つて行つたところでも、台湾神社、総督府官邸、図書館、医学専門学校、煙草専売局、公園。」（『明るい台湾の生活』頁18）つまるところ、林

美美子という「官僚臭」く「教室にはいつたやうな窮屈さを感じた」植民地の景観は、生田の描写では内地で流通している給葉書に見られるやうな、内地人が形成し、居住する「近代都市」となるのだ。宗主国の権力を象徴するような台湾総督府を初めとする雄大な鉄筋コンクリートの建物がある風景、舗道やそれを飾った樹木も含めた植民地の都市景観を目の当たりにした林の「まさに植民地植民地だ」は、植民地建設の権威を見せ示すものを距離をもつて眺めた書き手の立場を示すことばとしても読み取れるのだ。都市建設や街の景観の変化をめぐって、とくに一九二三年の関東大震災から「帝都復興」までの東京の景観の移り変わりの過程を目の当たりにしてきた林だからこそ、敏感に反応するのである。「まさに

植民地植民地だ」の「まさに」は、諸君が私たちの認識を再確認することばであると、読み手の、植民地建設前、換言すれば離れしまった街の本来の景観や、植民地的ではない風景」に対する読み手の想像や好奇心を掻き立てる作用のあるものであり、次の節から展開されていく「植民地ではない風景」の予定をなすものでもある。

四、台北の風景(2)

城外は「すべてがゴッホの絵だ」

「台北」の節は「城外は、萬国旗のやうな風景だ、台湾の動脈が踊つてゐる。すべて町を物するには自由行動に限ります」（頁145）という文でペリオードが打たれ、それに次ぐ「大稻埕」の冒頭部は「台湾に白紙である私は、一直何でもかでも驚いて通り過ぎた」で始まる。前述したやうに「城外」とはことは通り市が集まる城内以外の地域で、なかでは特北町方面の大稻埕は台湾人の低所得者層が中するエリアでもある。

林と生田が、総督府が意図的に講演団の行程に組みなかつた城外を見学したのは、巡講演終了後の自由行動の時間に限られていた生田の「台北について」では「引用者注：自車で行った北投温泉以外歩いたのは大稻埕のこかし、淡水河のほとり水牛のゐるところから萬華の龍山寺、乞食や狂人を養つてゐる愛

寮、貧兒を教育するところの×××××氏の

「人類の家」貧民窟、市場など（中略）女詩人林美美子氏と私はへうへうとして見歩いた。古祠に立寄り陋巷に青衣の台湾少女を愛しんだ」（『明るい台湾生活』頁18-19）と記述されている。それらの場所は「台湾風景」では登場人物も含めてあたかも映像のように描かれている。

「人類の家」は貧困層の生活改善及び不良少年の発生防止のため、稻垣藤兵衛が大稻埕で一九一六年に設立した施設であり、「愛々寮」は、台湾人施乾が萬華周辺の路上生活者のために自ら出資して土地を購入し、一九二三年に創設した救護施設である。

「台湾風景」の記述によれば、林たちの大稻埕、龍山寺、萬華女紅場の見学は案内者の学生Sも同行しており、「愛々寮」もSの薦めで見学に行った。生田が簡潔に記述した「乞食や狂人を養つてゐる愛々寮」について、「台湾風景」はそこにいるさまざまな人たちを、具体的に描写している。「萬華の駅から近い乞食の部落で大稻埕と同じく此処も、台湾の×である。海賊上がりの老いた支那人、子どもの時から毛毒で成長の止つた、廿の一寸法師、終日鉄格子の中でゲラゲラ笑つてゐる男、その狂人の娼婦、癲病患者、阿片癮者、さまざまの敗残者が、山窟の巢のやうに、破れ風琴のやうないとをなみをしてゐた。」（傍点は原文のまま、頁117）。現在の台北市私立愛愛病院の前身である「愛々寮」は乞食以外、精神病

患者やハンセン病患者、性病、阿片中毒者なども収容していた。創設者の施乾は、「乞食の父」と呼ばれ、『乞丐社會的生活』（一九二三年）や『乞丐撲滅論』（一九二三年）などの著書のか、『乞丐撲滅協會』を一九二六年に組織した。

一九二八年訪台した菊池寛は、台北に浮浪者を見かけないことを不思議に思い尋ねたところ、「愛々寮」を案内されて感激し、帰国する際、施乾の著作を日本に持って帰る紹介したというエピソードが残っている。林と生田が見学した経緯や、案内者がここを紹介した理由については、文献が残っていないため知るよしはない。社会事業の乞食撲滅計画の苦心が紹介されていない「愛々寮」に関する記述は、植民地台湾への認識や台湾人への配慮が不足しているものとして同時代評で批判されている。確かに、給葉書となる城内の「植民地植民地」的な風景ではなく、渾沌としたゴッホの絵のやうな城外の街や、近代都会の景観に存在すべからざる漂流民や庶民に着目した内容が植民地への理解が欠如している、という指摘には反論の余地があまりないのだが、植民地を眺めるときの「あるべきまなざし」を林に求める前に、「台湾風景」に施された書き方の工夫を通して、この作品が持つ今日的な可能性を探ってみたいと考える。

おわりに

「植民地」ではない台湾の風景を 求めること・描くこと

北村兼子は林のいう「植民地」の景観とそこではない景観について次のように比喻している。「台北の大通を歩けば文化の欧米に遊んでゐるやうであり、横丁へ曲ると未開の村にひこんだやうであり、二十世紀に生れたたやうであり、十八世紀に飛び戻つたやうでもある。カイロの街を歩いてゐるやうな気分でも長春を通つてゐるやうな気分も、なんだかかい未成品を見せられたやうな感じがする。」（『台湾行進曲』、頁28）その後には引き続き「未成品」や不潔な家屋の淘汰を助けるのは台風風品「白アリだ」という。「二十世紀」と「十八世紀」の「カイロ」と「長春」、前者は歴史は進歩するものだという西洋の進歩主義的な歴史観に基づいた観点で現代性と後進性を表現し、後者は歴史のある都市と新興都市を例えに取り上げながら街の近代化の差違を表現している読み取れよう。北村の観点で言うならば、「深な家屋」はいずれ「中から白蟻、外から台風」というふうな淘汰され、そして「未成品」という街の景観はいずれ近代化されていくのだという街の風景、文化人以外の人物の描写はあまり見られず、論調も、北村の新聞記者としての職業柄を示すやうに、社説的である。

対照的に、林による台湾の風景は文学者としての彼女のスタイルを表現するものとなっている。例えば、愛々寮と同じ批判の対象となる「大稻埕」は次のように語られている。「大稻埕」大稻埕！ここは濁流である。歴史を売る市場である。「とてつもなく汚れたものや、とてつもなく美しいものは、形容するに非常に困難であるが、此大稻埕も、内地のどこにも見掛けられない、凄まじくも歴史的に汚れたところで、盗人市でもみてるやうに、すべてが渾沌としてゐる。」（『台湾風景』、頁116）その「形容に非常に困難である」、「渾沌としてゐる」台北城外は、むしろ林の創作に恰好な題材と考えられる。「北投温泉」の節にある「あまりにも植民地的温泉で、私には興味がなかった」がそれを裏付けるように、「台湾風景」では形容詞として使われる「植民地」は否定的な意味合いを有するものであり、作者が目指すのは絵葉書にない非植民地の風景であるのだ。官僚臭いものではなく、下町や底辺社会に引き寄せられ、描く林の作家としてのルンペン的なスタイルは、台湾旅行する三ヶ月前に「改造」で掲載された林の「九州炭鉱街放浪記」を想起させるものだ。

城外を語る冒頭は「台湾に白紙である私は、素直に何でもかでも驚いて通り過ぎた」という文だが、たしかにそのあまりの素朴さは林が持つ宗主国のまなざしを赤裸々に露出している。が、その「萬国旗のやうな風景」を通して

て描出される「動脈」のように力強く躍動している、大稻 或萬華女紅場などといった本島人が集まる町／総督府の絵葉書と異なる町こそ、命に溢れる「植民地ではない」台湾の町であり、林美美子が目指す「植民地を描く」文芸創作のスタイルだったとも言えよう。

「台湾風景」の最後の、「佐藤春夫氏の集々風景（旅びとの中）」は今でもスケッチ画のやうに目に浮かぶ。私にだってあの真似位は描けるはずだが（中略）雑事に乱れすぎてゐる」という一節は、創作者の心境を代弁する言葉としても読み取れるのだ。中村地平はその代表的な例であるが、戦前、佐藤春夫が描いたエキゾチックな風景に魅了され台湾を旅行した文化人は少なくなかった。逆に言えば、台湾を題材として取り上げようとする作家たちの、佐藤春夫作品を意識する心境も想像できる。林は「真似位できたはずだが」と言っているが、台北の城外を描写する部分はその「真似」の形跡が残っているように思われる。前述したやうに「大稻埕」や「萬華女紅場」の風景の、過度に粉飾されたと言つても過言ではない部分は、その一つの例である。城外の風景にとどまらず、伝統楽器の胡弓の音や台湾の建築物の特有な風景を形成している「灯の付き始めた」停仔脚（一階の屋根から突きさだしている庇）によつて醸し出されたエキゾチックな雰囲気は漂っているかに登場する、スイカの種を「赤い紙をべたべた貼ったやうがんだ貸席の窓から」

投けている台湾娘や「耳輪が雨のやうに長い」娼婦など、そのどれも台湾の風景を異國間的にエロティックに飾る題材となるのだ。だが、植民地ではない風景を強烈に求め書き手としての営為をどう考えればよいのか「台北の城内は常識以外の何ものもない。私は講演も博物館もおそよ静脈だ。（中略）だが、外は万国旗のやうな風景だ、台湾の動脈がこつてゐる」（頁145）動脈も静脈もは乳類生命を維持するには必要不可欠の血管であるが、作品「台湾風景」のなかでは著者と等身の語り手である「台湾の風景に憧れてきた私に興味のあつたのは「植民地植民地」の景観はなく「台湾台湾」の景観である。作品としての「台湾風景」や書き手である林美美子の作家としての姿勢に植民地的な批判が欠如しているという意見は否定できない。しかし作の内容からそう簡単に決めつけられない部分も確かにある。例えばサトウキビを勝手に「土人小作農の娘」のエピソードや、サトウキビを「るものが「めつたに食べられない」と云ふ、台分は何のために暑いのか？」（頁149）などから、書き手の植民地資本主義を批判する姿勢も窺える。

て、植民地文学の現代における読みの価値を見いだす方法こそ、その研究を豊かにするのだと思いつつ、目下林の「台湾風景」の時代的な価値をその世相を描き出す点にあると考へたい。

付記：

「台湾風景」のほか、台湾で女中として働く日本人女性を描く「植民地で会った女」がある。「放浪記」連載中と同時期に「女人芸術」で活躍していた台湾にゆかりの作家である真杉静枝がいた。「植民地で出会った女」に登場する男性に恵まれなかった植民地に在住する不幸な内地人女性のモチーフは、真杉の初期作品「歌長の若き妻」（『大調和』1927・8）や「異郷の墓」（『若草』1929・1）にも見られる。林美美子と真杉静枝、その両者の交流についての資料は今回残念ながら見当たらなかった。植民地を語るレトリックにある不幸な日本人女性という設定が果たした機能について拙稿「帝国女性と植民地支配 1930-1945における日本人女性作家の台湾表象」（名古屋大学大学院博士論文2005）を参照された。

本原稿の作成に当たって山下聖美先生より資料を提供していただいたことをこの場を借りてお礼を申しあげる。

- 引用部分の旧漢字は一部を除いて新漢字に置き換えている。
- 「他に手芸、洋裁の女の人二人」について、同時期の台湾の新聞記事「舌端火を吐く 新婦人の雄叫び」では「ドレス洋裁学院の佐藤都子、彌富須美子」と記されている（『台南新報』1930年1月8日付けの記事）。また該記事は一行十人としているが、のちに「外地文化協会」の主催者で生田花代を統率の講演で台湾に招いた鳥居義太郎の名前が取り上げられていることは、生田の記述との照合によって判明する。
- 「桜花学園大学人文学部研究紀要」8号
- 「FIERCE JOURNAL」6号
- 望月百合子について「女人芸術のひび」と（尾形明子、ドメス出版1981・11）頁23-25を参照。
- 1920年代後半から30年代頃の台湾モダンガールと結婚制度について拙稿「植民地台湾で歌われたモダンと自由恋愛—1930年代の閩南語流行曲をめぐって」（『立命館言語文化研究』24・2、2013・02）を参照されたい。「聖母良妻」を唱えるやうという総督府の婦人文化団体への要求は、同時代のモダンガールなどといった風潮への反発として考えられるが、この点についてさらに綿密な論証が待たれる。
- 尾形明子「女人芸術のひび」とドメス出版1981・11頁25
- 同上、頁26-27
- 堀江かこ江たは「女人芸術」と同時代の恋愛論、自らの生活に「暴露する」この雑誌の性格について、「昭和初期「恋愛論」」における「女人芸術」の位置（『共同セミナ』（大学院教育改革支援プログラム）「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書、2010・3）で論述されている。
- 「左に、その時の旅行記（当時執筆）を示す」とあるやうに、「『明るい台湾の生活』に収録される旅行記は、それぞれ第一回の台湾旅行の際に書かれたものやうだが、出版年代から考えると第一回の部分は時局に合わせて修正が施されたことも推測されよう」
- 生田は10年後の1941年11月、再び統帥講演の仕事で台湾に渡った。「十年はすぎ、十二年目を迎へた昭和十六年十一月、第一回の台湾行の時、一青年として同

- 行した鳥居義太郎氏が、外地文化協会を主宰してゐるが、外地へ内地の事を、内地へ外地の事を紹介する事をしつづけてゐるといひ、私に、購するに、統帥台の婦人方への、統帥講演の仕事をして、私は、このの夫に死別してもう十三年になつて居り、身軽な文文生活なので、二度台湾へ行くに何の難もなかつた。二人行く事に、若手の女流作家、田島津子女史のした記録（引用者注：「台湾の新しい姿を見る」である。「生田花代「明るい台湾の生活」」頁30-31）
- 「林美美子の『台湾風景』を収める『改造三月号』（『桃生「台湾民報」1930・4・29日付け）のほか、在中の葉川きぬ子宛の絵葉書（台湾台北より、年月不明）にも「お娘さん」「花世さん」などの付き合に残れることが概ね見られる。
- 林美美子と台湾の関連についての基礎資料は「林美子における台湾、中国、満洲、朝鮮—基礎資料提示と今後の研究課題」（山下聖美「芸術学部研究紀要」2012・9）を参照されたい。
- 北村兼子「台北市街を次のやうに描いている。」「北の大通を歩けば文化の欧米に遊んでゐるやうである。」「横丁へ曲ると未開の村に迷ひ込んだやうである。」「二十世紀に生まれたやうであり、十八世紀に飛戻つたやうである。」（『新台湾行進曲』頁28）
- 城内（現中正区）は総督府があり植民地行政の中となつていた地域で、内地人や中流以上の階層が住する地域でもあった。
- 福垣兵衛の「人類の家」に関して、「同志社大学」恒藤兵衛の基督教社会事業をどうとらえるか—本統治時期台湾の植民地化を中心に—（宮本義典「2010同志社女子大学 総合文化研究所紀要」27巻）を参照。
- 前掲注16に「同志社大学 恒藤兵衛の基督教社会事業をどうとらえるか—日本統治時期台湾の植民地化を中心に—（宮本義典「2010同志社女子大学 総合文化研究所紀要」27巻）を参照。
- 「食食経済事業の展開と継承」（『橋本千鶴2010同志社女子大学 総合文化研究所紀要』27巻）を参照。
- 桃生、林美美子の「台湾風景」を収める『改造三月号』（『台湾民報』1930・4・29日付け）